第十一章　明石の物語　入道の手紙

［第一段　明石入道、手紙を贈る］

　かの明石にも（かの大祖父にあたる明石入道に於いても）、かかる御こと伝へ聞きて（若宮の御出産を伝え聞いて）、さる聖心地にも（さるひじりごこちにも、そうした俗世を離れた仏道心にも）、いとうれしくおぼえければ（とても嬉しく思ったので）、

　「今なむ（今こそ）、この世の境を心やすく行き離るべき（未練も無く入山すべき時だ）」

　と弟子どもに言ひて（と弟子たちに言って）、この家をば寺になし（邸を寺にして）、あたりの田などやうのものは（所領の田などは）、皆その寺のことにしおきて（皆その寺領にして）、この国の奥の郡に（この播磨国の奥の方に）、人も通ひがたく深き山あるを（人も通わぬ深い山があるのを）、年ごろも占めおきながら（数年前から所有して置いたのだが）、あしこに籠もりなむ後（彼の地に籠もった後は）、また人には見え知らるべきにもあらずと思ひて（もう誰にも会うことはないと思って）、ただすこしのおぼつかなきこと残りければ（自分の家系が王位に繋がるかどうかという、あと少しの不安があったので）、今までながらへけるを（今まで入山を思い止まっていたが）、今はさりともと（是でもう大丈夫だと）、仏神を頼み申してなむ移ろひける（後の事は仏神に頼み申して引越しました）。

　この近き年ごろとなりては（最近では）、京に異なることならで（入道は京には特に変わった事が無ければ）、人も通はしたてまつらざりつ（人を遣いに立て申すこともなかったのです）。*これより下したまふ人ばかりにつけてなむ（こちらから明石へ遣いに下しなさる使者にだけは返書のついでに）、一行にても（ひとくだりにても、ほんの一行ほどの文で）、尼君さるべき折節のことも通ひける（入道は尼君宛に注意事項だけは知らせたのです）。思ひ離るる世のとぢめに（しかし今回は、入山に際しての最後の思いとして）、文書きて（手紙を書いて）、御方にたてまつれたまへり（御方に差し上げなさいました）。　*「これより下したまふ人」は注に＜『集成』は「こちら（京の方）から遣わされる使者にことづけるぐらいで」。『完訳』は「源氏が明石に派遣した使者」と注す。＞とある。「くだしたまふ」という敬語遣いだから、この主語は殿か明石御方あたりだろうが、殿から明石入道に直接に文を出す、というのは、現在の関係性からして考え難い。私はこの文の主語は明石御方だと思う。御方の遣いだから、入道は御方への返書の序でに尼君への伝言を頼めたのだろう。ただ、原文が「これより」という書き方をしていることを尊重して、言い換えも＜こちらから＞にして置く。また、「人ばかりに、つけてなむ、一行にても、尼君、さるべき、折節のことも、通ひける」の各語が示す具体的な内容が分からず、当然に文意も分からない。是は難文と言うよりは、いくらか欠損のある不全文なのではないか。であれば、どうにも釈然としようもないが、幾つかの解釈があるだろう中で、前後の文脈に繋がるように読めば、こんな所か。

［第二段　入道の手紙］

　「この年ごろは（この何年かは）、*同じ世の中のうちにめぐらひはべりつれど（あなたと同じ俗世の中に暮らしていましたが）、何かは（何しろ）、かくながら身を変へたるやうに思うたまへな

しつつ(このように剃髪僧衣して仏門入りした心算で居りますので)、*させることなき限りは(どうということが無い限りは)、*聞こえうけたまはらず(手紙も通わし申しませんでした)。　*「同じ世の中のうち」は変な言い方だが、何となく分かる気がする。「世の中」を＜世俗、俗世＞と言い換えれば、出家者の普通の挨拶に聞こえる。 *「させること」は＜然程の事＝たいしたこと＞。 *「聞こえ」は＜手紙を差し上げる＞。「承る」は＜手紙をお受け取りする＞。

仮名文(かなぶみ、女手の手紙を)見たまふるは(拝見するのは)、目の暇いりて(話し言葉なので文字数が多く、それを目で追うのに時間が掛かって)、念仏も(読経修行も)*懈台するやうに(怠けてしまうようで)、*益なうてなむ(困るのです)。　*「懈台(けたい)」は＜仏語。善行を修めるのに積極的でない心の状態。精進(しょうじん)に対していう。＞と大辞泉にある。　*「益無し(やくなし)」は＜かいがない。無益である。つまらない。＞または＜困ったことである。＞と大辞泉にある。敬語遣いの文だが、言っていることは実娘宛てならではの身勝手な理屈だ。いやだから、その親子関係だからこそ分かり合える、この慶事の喜びを分かち合う文での、出家を出汁にした軽口なのだろう。

御消息もたてまつらぬを(こちらの近況もお知らせ申さないが)、伝てにうけたまはれば(聞くところに拠り申せば)、若君は春宮に参りたまひて(姫君は皇太子に入内なさって)、男宮(をとこみや、男の御子が)生まれたまへるよしをなむ(御生まれなさったとのこと)、深く喜び申しはべる(深く喜び申し上げます)。

そのゆゑは(しかしその喜びというのは)、みづからかくつたなき山伏の身に(私自身のこの拙い山伏の身に)、今さらにこの世の栄えを思ふにもはべらず(今さらに現世の栄誉の思うからではありません)。過ぎにし方の年ごろ(昔は何年間も)、*心ぎたなく(欲まみれで)、*六時の勤めにも(定時の読経にも)、ただ*御ことを心にかけて(ただ貴方の良縁を願って)、*蓮の上の露の願ひをばさし置きてなむ念じたてまつりし(自分の極楽往生は差し置いて念仏読経を上げていたものです)。　*「心汚し」は＜［形ク］卑劣である。心が卑しい。＞と大辞泉にある。　*「六時の勤め」は＜六時に念仏・誦経(ずきょう)をすること。六時の勤行(ごんぎょう)。＞と大辞泉にある。此処で言う「ろくじ」とは＜仏教で、一昼夜を晨朝(じんじょう)・日中・日没(にちもつ)・初夜・中夜・後夜(ごや)の六つに分けたもの。この時刻ごとに念仏や読経などの勤行(ごんぎょう)をした。＞とある。ざっと、定時読経か。　*「おんこと」の「御」は明石御方への敬語。ということは、入道の邪心は＜娘の玉の輿＞。 *「はちすのうへのつゆのねがひ」は＜極楽往生の願いをいう。＞と注にある。

*わがおもと生まれたまはむとせし(他ならぬ貴方様がお生まれになろうという)、*その年の二月の(そのとしのにぐぁちの)その夜の夢に見しやう(ある夜の夢に見たのは)、　*「わがおもと」は「我が御許」で＜我が娘の貴方様＝私の貴方＝愛しの君＞みたいな語感で、当事でもこれほどの親しい言い方をしたのかと驚くが、客観的な理屈では＜他ならぬ貴方様＞を意味する。　*「その年」が何年前か明示されれば明石御方の年齢がはっきりする。この人の年齢は何故か明示がなく、配役構成の理解を妨げている。若紫巻で 18 歳の光君が 10 歳の若紫を見出す三月末の北山参りで、到着後の発見前の庭の散策中に、供の良清の雑談にこの明石入道とその娘の話題が語られた。その時点で、その明石の娘に縁談申し込みがあったという事から、その娘は裳着を終えた、少なくも内輪ではあっても世間へのお披露目を済ませた、年回りなのだと私は読んで、紫君より三歳年上を想定している(現在で紫の上 33 歳、明石御方 36 歳)が、多くの読み手には二歳年下と受け取られているらしく、本文に明示が無い事が私にはずっと懸案になっている。そして、此処に至っても明示は無い。

『みづから*須弥の山を(私は須弥山を)、右の手に捧げたり(右手に見ていました)。　*「しゅみのやま」は「須弥山(しゅみせん)」で＜《(梵)Sumeruの音写。妙高山と訳す》古代インドの世界観が仏教に取り入れられたもので、世界の中心にそびえるという高山。この山を中心に七重に山が取り巻き、山と山との間に七つの海があり、いちばん外側の海を鉄囲山(てっちせん)が囲む。この外海の四方に四大州が広がり、その南の州に人間が住むとする。頂上は帝釈天(たいしゃくてん)の地で、四天王や諸天が階層を異にして住み、日月が周囲を回転するという。蘇迷盧(そめいろ)。＞と大辞泉に説明される。仏教概念は分からないが、Sumeruはシュメールの音からして古代バビロンは今のイラクあたり。グレート・ジャーニーでペルシャからインドへ渡った人たちが古里の古代文明を美化して理想視した、という筋立ての話は、前人未到の地を切り開き行く困難を乗り越える為の同志の勇気を奮い立たせたかも知れない。であれば、これは元々は東方開拓史の趣だが、どうやら明石入道は自らの明石下向に使命感を得る事で自分の存在意義を納得したかったらしく、その京都からの西方下向史の意義を娘の明石御方に夢占いの謎解きで説いて聞かせる心算らしい。つまり、入道の言う「須弥山」は＜雲上の内裏＞のことだ。住吉から明石へ船を出せば、京は右手後方に見ることになる。

山の*左右より、月日の光さやかにさし出でて世を照らす。みづからは山の下の蔭に隠れて、その光にあたらず。山をば広き海に浮かべおきて、小さき舟に乗りて、西の方をさして漕ぎゆく』　*「左右」は「ひだりみぎ」ではなく「さいう(さゆう)」と読みがある。漢語調の言い回しらしい。語調は仏典めいているのかも知れないが、此処の情景描写は夢解きではなく、実際の西方下向での入道の実感だったに違いない。いつか自分の子孫が天下を取る為に、自分は日陰の存在を覚悟して、今の政権態勢からは離脱して、山を外側の広い視点で見直して、小さい船ながら独立して、西方で好機を窺う、という筋そのもののを写した情景だ。少し前までは、まだ混沌としていた世情が次第に藤原本家の権力体制に固まり、その末端に連なっていても決して本流には乗れないことが明白となった平安中期。入道は中央役人でそこそこの地位を得る事が出来る家柄ながら、あえて地方役人を志願した。中央役人は厚く身分保障されたが、その地位は藤原氏への忠誠を認められて与えられる従属的なものだ。それに引き換え、地方役人の身分保障は薄いが、その時代は技術革新に拠る生産性向上が可能で、現場監督の裁量で増産蓄財を実現すれば、その地位は交渉権を持つ事業者として独立性の高いものだ。この入道の立場は既に何度も見てきたが、此処で改めて明石御方に、いずれは桐壺妃や産まれたばかりの若宮にも伝え聞かせるべき物語として書き置いた、ということなのだろう。この文は講談の名調子の趣きで、言い換え無用だ。

となむ見はべし(とのように見ました)。

*夢覚めて(このことを冷静に考え直してみると)、朝より*数ならぬ身に頼むところ出で来ながら(明石に着いたその朝から取るに足らない我が身にも、いつかは子孫に天下を取らせようと、期する所が出て来たわけなので)、『何ごとにつけてか(何としても)、さるいかめしきことをば待ち出でむ(その壮大な夢を実現したい)』と、*心のうちに思ひはべしを(心に秘して居りましたところ)、　*「夢覚めて朝より」は見過ごしてしまいそうだが、「夢」は入道が明石下向に見た光景を、名誉欲と仏心とをない交ぜにした気持で、明石に着任した後で＜整理してみると＞という文意であり、またそういう時系列での物語だという意味を示している、気がする。　*「数ならぬ身」は入道が自身を示す言い方。　*「心の内に思ふ」を＜思い悩む＞ではなく＜心に秘す＞と読む。と、「頼むところ出で来ながら」の「ながら」は逆接ではなく順接に、「何ごとにつけてか」の「か」は反語・疑問ではなく決意に、取ることになる。なお、「思ひはべしを」の「を」も順接。

そのころより孕まれたまひにしこなた(そのころに孕まれなさった貴方が)、*俗の方の書を見はべしにも(儒教の教えを見ましても)、また*内教の心を尋ぬる中にも(また仏典を調べまして

も)、*夢を信ずべきこと多くはべしかば(願いを託せる授かりものと信じるに値する子宝話が多くありましたので)、賤しき懐のうちにも(卑しい身分での子育てでも)、かたじけなく思ひ*いたづきたてまつりしかど(大事に思ってお世話申し上げましたが)、力及ばぬ身に思うたまへ*かねてなむ(それだけでは力及ばぬ身と自分のことを考えざるを得ませんで)、*かかる道に赴きはべりにし(出家致した次第です)。 *「ぞくのかたのふみ」は注に＜仏典以外の書物、主に儒教の経典などをさす。＞とある。儒教、と言ってしまおう。 *「ないけうのこころ」は注に＜仏典、仏教の主旨。＞とある。 *「夢を信ずべきこと」は＜夢が信じられる証拠＞という言い方だが、それを経典に見たという事だから、此処の文意は＜子宝を得た事が夢を託す対象を得た事だという考え方、を記したいくつもの論文＞という意味に解す。 *「いたづく」は「労く」で＜いたわる、世話する＞。ところで、「奉りしかど」は＜既に奉ったが＞という言い方だ。入道は在京中から仏心はあったらしいが、出家したのは明石に赴任してからであり、此処では＜何年か姫を育てた後で＞かつ＜離任後に出家した＞という文意にも見える。で、その出家に際して信奉神を住吉神に定めたのだとしたら、十四年前の明石流浪期のことだが明石巻二章六段に「住吉の神を頼みはじめたてまつりて、この十八年になりはべりぬ」という明石入道の弁が語られていたが、その十八年前には明石御方は既に何歳かに成長していた、という私の推論に少しばかりの説得力を与えているのかも知れない。 *この「かぬ」は「予ぬ(先を見る)」と「兼ぬ(他方で考える)」を兼ねてみれば、どうしても「思ひかぬ(思わずには居られない)」という言い方だろうか。 *「かかる道」は「赴く」と述辞されているからか、訳文では＜山陽道下向＞の意味に取っているようだが、「おもむく」の原義は「面向く(関心が向く)」であって、全体の文脈からして此処の文意は＜仏道入りする＝出家する＞とのように私は読む。

また(そして)、この*国のことに沈みはべりて(この播磨国の地方官に降格して)、老の波にさらに立ち返らじと*思ひとぢめて(老後はもう都へは立ち返るまいと覚悟を決めて)、この浦に年ごろはべしほども(この明石の浦に何年も暮らす内に)、*わが君を頼むことに思ひきこえはべしかばなむ(源氏殿を我が主君と頼ることに思い申すことになりましたので)、心一つに多くの願を立てはべし(その源氏殿の御力で我が家系が王位に近づくことだけを願って多くの神仏に祈ったのです)。その*返り申し(その大願成就の御礼参りが)、平らかに思ひのごと時に*あひたまふ(無事に出来る時代に貴方は生まれ合わせなさったのです)。 *「国のこと」は＜国司の仕事＝地方官＞。「この」は＜播磨国＞。「沈む」は＜降格する＞。 *「思ひ閉ぢむ」は＜断念する、思い切る＞と古語辞典にある。自分で下した決定なのだから＜覚悟を決める＞くらいか。 *「わが君」は＜我が主君＝源氏殿＞。「はべしかばなむ」は＜侍り、しか、ば、なむ＞で、「侍り」は「居り」の丁寧語、「しか」は過去の助動詞「き」の已然形で＜変化があった＞ことを示し、接続助詞「ば」は「き」の已然形に付いているので条件変化を受けた述辞を下に導き、「なむ」は理由を強調する係助詞だから、通せば＜～ということに成り申しましたので＞という言い方。 *「かへりまうし」は＜神仏に願を立てた後の御礼参り＞と古語辞典にある。 *「時にあひたまふ」の主語は明石御方。「時に会ふ」は＜その時期に生まれ合わせる＞と古語辞典にある。

若君(姫君が)、国の母となりたまひて(后位にお就きに成って)、願ひ満ちたまはむ世に(願いが満たされなさった時に)、住吉の御社(みやしろ)をはじめ、果たし申したまへ(各神仏に御礼参り為されませ)。さらに何ごとをかは疑ひはべらむ(もう満願は間違いないでしょう)。

この一つの思ひ(この一つの願いが)、近き世にかなひはべりぬれば(近い将来に適ったなら)、*はるかに西の方、十万億の国隔てたる(はるか西方の極楽の)、*九品の上の望み疑ひなくなりはべりぬれば(最上の往生が確かなものになりますので)、今はただ迎ふる*蓮を待ちはべるほど(今はただ冥土のお迎えを待つばかりですが)、その夕べまで(その時が来るまでは)、水草清き山の

末にて勤めはべらむとてなむ(水草清き山奥で念仏行に明け暮れようかと)、まかり入りぬる(入山いたします)。　*「はるかに西の方、十万億の国隔てたる」は注に＜阿彌陀経「是ヨリ西方、十万億ノ仏土を過ギテ、世界アリ、名ヅケテ極楽トイフ」＞とある。　*「九品(くほん)」は＜浄土教で、極楽往生の際の九つの階位。上中下の三品(さんぼん)を、さらにそれぞれ上中下に分けたもの。上品上生(じょうぼんじょうしょう)・上品中生・上品下生(げしょう)・中品上生・中品中生・中品下生・下品(げぼん)上生・下品中生・下品下生の九つ。ここのしな。＞と大辞泉にある。「くほんのうへののぞみ」は＜九階等の最高の上品上生の極楽往生をいう。＞と注にある。*「はちす」は＜極楽浄土に往生した者の座る蓮華の座＞のことで、即ち＜死後の世界＞。

光出でむ暁近くなりにけり、今ぞ見し世の夢語りする」(和歌 34-20)

もう夜明け近くになりました」(意訳 34-20)

*注に＜入道の辞世歌。『完訳』は「「月日の光--」に照応し、若宮の即位、女御の立后も近づいたとする。弥勒出生の暁の光も思い合せた表現、とする説もある」と注す。＞とある。「月」が＜后位＞、「日」が＜帝位＞、を示すとのこと。で、今の文面執筆時が夜明け近いことと、夢解きのまとめを複意させた歌、ということになりそうだ。が、「今ぞ見し世の夢語りする」の「今ぞ」はそれだけで「暁近く」を意味し、「暁近くなりにけり」は「光出でむ」と重複していて、歌自体に思いが凝縮された緊迫感は無く、是は歌というより又も字数を踏んだ講談調の名調子に聞こえる。

とて(と結ばれて)、*月日書きたり(文末に日付がありました)。　*この「月日」は＜歳月＞ではなく＜日付＞だが、この語用こそ夢解き切り出し部の「山の左右より月日の光さやかにさし出でて世を照らす。」に照応させた洒落言葉で、上の歌の「光出でむ」に「月日の光」の意を込めてあるという解説であると同時に、いかにもこの文面執筆が実際に「暁近くなりにけり」であって、実感として「今ぞ見し世の夢語りする」という情緒を漂わす。

[第三段　手紙の追伸]

「命終らむ月日も(私の命の終わる月日も)、さらにな知ろしめしそ(殊更お知り頂くこともありません)。いにしへより人の*染めおきける藤衣にも(昔から慣習となっているフジゴロモの喪服にも)、何かやつれたまふ(身をやつしなさる事はありません)。　*「染む」は＜馴染む→習慣にする＞。衣(ころも)の縁語使いなのだろう。

ただ*わが身は変化のものと思しなして(とにかく貴方は御自身を生身の人では無しに想念の塊と思い做し為さって)、老法師のためには*功徳をつくりたまへ(この老法師を思うなら善行を積んで下さい)。この世の楽しみに添へても(栄華の中にあっても)、後の世を忘れたまふな(後世の為の精進を怠りなさいますな)。　*「わが身」は明石御方御自身。「変化(へんげ)」は＜『集成』は「変化」は神仏が人の姿をかりて仮にこの世に姿を現したもの。人の子（明石の入道の娘）だと思わずに、の意」と注す。＞と注にある。　*「功徳をつくる」は＜善行を積む＞。私(入道)の存在を考えるなら、親子の情で偲んで墓参りするのではなく、先人の老法師として生きた意志を継いで精進を続けてくれ、という言い方なのだろう。しかし、仏典に疎い現代人の一般的な認識では、服喪や墓参りは故人を偲ぶというよりは善行の心算なのではないか。善行の何たるかは知らないが、故人を偲ぶのは何時でも何処でも出来るし、むしろ不意に思い出すもので、外形上で体裁を施す意義は記念であり、その様式の多くは慣習上で仏典に則っており、それは善男善女の営みとして広く受け入れられている。私はそんな感覚だ。だから、この文は分かり難い。

願ひはべる所にだに至りはべりなば(念願の極楽に行き着けたなら)、かならずまた対面ははべりなむ(必ず再会はあるものです)。*娑婆の他の岸に至りて(彼岸で)、疾くあひ見むとを思せ(直ぐ会えるとお思い下さい)」　*「しゃば」は<《(梵)sahaの音写。忍土・堪忍土などと訳す》仏語。釈迦が衆生(しゅじょう)を救い教化する、この世界。煩悩(ぼんのう)や苦しみの多いこの世。現世。娑婆世界。>と大辞泉にある。

さて(このように追伸があって)、かの社に立て集めたる願文どもを(住吉大社に奉り集めてあった願文書類を)、大きなる沈の文箱に封じ籠めてたてまつりたまへり(大きな高級本箱に仕舞って御方に送り申し上げなさいました)。

尼君には(入道は尼君には)、ことごとにも書かず(細かな事は書かず)、ただ、

「*この月の十四日になむ、草の庵まかり離れて、深き山に入りはべりぬる。　*注に<以下「対面はありなむ」まで、入道から尼君への手紙。『完訳』は「後に「三日」とあり、手紙の書かれたのは十二日。三月十余日の若宮誕生の報に接した入道は、即座に入山を決意し実行した」と注す。>とある。確かに即断であり、また知らせも早い。三月十余日といっても、出産は十日で、その日の内か翌未明には早馬で明石に一報が届いたのだろう。尤も、懐妊も出産予定日も分かっていただろうから、入道は疾うに入山の準備はしていたのだろう。

かひなき身をば(つまらないこの身は)、熊狼にも施しはべりなむ(熊や狼にでも呉れてやりましょう)。そこには(そっちは)、なほ思ひしやうなる御世を待ち出でたまへ(しぶとく念願叶った御世になるのを見届けなさいな)。*明らかなる所にて(いつか笑って)、また対面はありなむ(また会いましょう)」　*「明らかなる所」は注に<悟りの世界。極楽浄土をさす。>とある。ということは、この「明らか」は<賢明な>という意味だろうか。最後の言葉が辛気臭いのは気分が乗らない。私はこの「明らか」を<心も天気も晴れて曇りが無い状態>と読みたい。

とのみあり。

[第四段　使者の話]

尼君、この文を見て、かの使ひの*大徳に問へば、　*「だいとこ」は<高僧>という言い方のようだが、この人物は後述されるが元々は子飼の郎党だったらしく、尼君にとっても懐かしみのある者のようだ。出家後の入道にも付き従い、今や寺となったかつての屋敷を預かるという人生だ。尤も、丁稚から大番頭に成ったと言っても、企業論理から見れば利潤は再投資に回されず主人家に食い潰されて、番頭は組織縮小に伴う事務処理の後始末に追われるというのが実態だったような気はするが。

「この御文書きたまひて(入道殿はこの御文を書きなさって)、三日といふになむ(三日目という日に)、かの絶えたる峰に移ろひたまひにし(かの人跡絶えた山奥にお入りになりました)。なにがしらも(私ども弟子たちも)、かの御送りに(その御送りに)、麓まではさぶらひしかど(麓まではご同道いたしましたが)、皆返したまひて(入道殿は皆を返しなさって)、僧一人、童二人なむ(後は僧一人と見習い小僧の二人を)、御供にさぶらはせたまふ(供にお付けなさいました)。今はと世を背きたまひし折を(殿が思い切って出家なさり入道と成られた時が)、悲しきとぢめと思

うたまへしかど(悲しみの絶頂かと存じていましたが)、残りはべりけり(まだこんな先行きの顛末があったのですね)。

年ごろ行なひの隙々に(長年と念仏行の合間合間に)、寄り臥しながら掻き鳴らしたまひし(楽な姿勢で掻き鳴らしていらっしゃった)琴の御琴(きんのおんこと、七弦古琴や)、琵琶とり寄せたまひて(琵琶を手に取りなさって)、掻い調べたまひつつ(少しお弾きになっては)、仏にまかり申したまひてなむ(邸の仏壇にお別れの挨拶を申しなさって)、御堂に*施入したまひし(入道殿はそれらの楽器を御寺に献上なさいました)。 *「施入(せにふ)」は<寺や神社に財物を献上すること。また、その物。>と大辞泉にある。

さらぬものどもも(その他の物も)、多くはたてまつりたまひて(多くは寄進なさって)、その残りをなむ(その残りを)、御弟子ども六十余人なむ(弟子たちの六十人ほどの)、親しき限りさぶらひける(入道殿に個人的に仕えた者ばかりが残っていましたので)、ほどにつけて皆処分したまひて(職分に応じて皆分け与え下されて)、なほし残りをなむ(更にその残りを)、京の御料とて送りたてまつりたまへる(こちらの分としてお送り申しなさったのです)。

今はとてかき籠もり(それではと入道殿は引き籠って)、さるはるけき山の雲霞に混じりたまひにし(あの遠い山の霞に紛れ隠れてしまいなさったので)、むなしき御跡にとまりて(空っぽの御跡の寺に留まって)、悲しび思ふ人びとなむ多くはべる(悲しく思う者が多く居ります)」

など(などと応え申す)、この大徳も(この高僧も)、童にて京より下りし人の(子供の時に京から下った者が)、老法師になりてとまれる(老法師となって残っているので)、いとあはれに心細しと思へり(言葉通りに心細い思いでした)。仏の御弟子のさかしき聖だに(釈迦の御弟子の賢い聖人でさえ)、*鷲の峰をばたどたどしからず頼みきこえながら(その教えを良く承知していながら)、なほ*薪尽きける夜の惑ひは深かりけるを(それでも釈迦入滅の夜の悲しみは深かったというのに)、まして尼君の悲しと思ひたまへること限りなし(まして尼君が入道の入山を悲しく思いなさること甚だしい)。 *「わしのみね」は「霊鷲山(りゃうじゅせん)」のこととあり、大辞林に<インドのビハール地方ラージギル(古代マガダ国の都、王舎城)の東北にある山。釈迦が法華経などを説いた地として有名。霊山(りようぜん)。耆闍崛山(ぎじやくつせん)。鷲(わし)の山。鷲山(じゆせん)。>とある。 *「薪尽く」は<《「法華経」序品の「仏この夜滅度し給ふこと、薪尽きて火の滅するがごとし」の句から》釈迦(しゃか)が入滅する。>と大辞泉にある。

[第五段　明石御方、手紙を見る]

御方は(明石御方は)、南の御殿におはするを(春の町の寝殿母屋にいらっしゃったが)、「かかる御消息なむある(明石からお手紙がありました)」とありければ(知らせがあったので)、忍びて渡りたまへり(目立たないように冬の町へ渡りなさいました)。*重々しく身をもてなして(御方は若宮を御世話する責任上で席を外せず)、*おぼろけならでは(簡単には)、通ひあひたまふこともかたきを(行き来なさる事も出来ないが)、「あはれなることなむ(大事な事のようです)」と聞きて(と聞いて)、おぼつかなければ(気懸かりなので)、うち忍びてものしたまへるに(心配を隠してお見えになると)、いといみじく悲しげなるけしきにてゐたまへり(尼君はとても深刻に悲しそ

うな様子で座っていらっしゃいました)。　*「重々し」は注に＜主語は御方。今は若宮の祖母としての重々しさをもって振る舞う。＞とある。ただ、御方の印象は、威厳がある、というよりは、制限があって自由が利かない、というものなので、此処でも、責任上で立場が重い、と読んで置く。　*「おぼろけなり」は＜普通だ＞と＜普通ではない＞のどちらの意味にもなる言い方らしい。が、多くの＜普通だ＞の意味の場合は下に打消す形で使われる、と古語辞典にあるので、普通は＜普通ではない＞ことを示す語なのだろう。普通ではない事がなければ、という言い方は、簡単に言えば＜簡単には＞だ。

火近く取り寄せて(灯りを手元に寄せて)、この文を見たまふに(この手紙を御覧になると)、げにせきとめむかたぞなかりける(御方も涙を堪える事は出来ませんでした)。よその人は(他人は)、何とも目とどむまじきことの(別に目を止める事もない文面に)、まづ、昔来し方のこと思ひ出で(先ず昔のことが思い出され)、恋しと思ひわたりたまふ心には(懐かしく思い続けなさる心に)、「あひ見で過ぎ果てぬるにこそは(二度と会えずに終わってしまうのか)」と、見たまふに(思いなさると)、いみじくいふかひなし(言葉もありません)。

涙をえ*せきとめず(御方は涙を止められずに)、この夢語りを(この入道の夢解き話を)、かつは行く先頼もしく(一方では行く末頼もしく)、　*「せきとめず」の「ず」は文意を見れば、打消しの助動詞「ず」の終止形で文を結ぶのではなく、連用形で下に続ける構文なのだろう。が、この「ず」には接続助詞が付かない語用が多いらしく、文意によって接続詞・接続助詞を補って読むべきもののようだ。で、下に「かつは(その反面)」という副詞語用があるので、此処は逆接なのだろう。ところで、「ず」は助動詞とされているが、動詞の未然形に付いて＜～ではない＞と形容する状態表示の語なので、事態変化を示す多くの助動詞とは違って、未活用の助詞と見るべきではないのだろうか。一説には、「ず」は打消の助動詞「ぬ」の連用形「に」に動作動詞「す」が付いて成立した、との推定があると古語辞典に紹介されている。「にす→んす→ず」という音便だろうか。是は、「ず」を「ぬ」の連用形と見做す現代語の解釈に符合する。が、丁度此処での語用にあるような、文末とならない「ず」を接続助詞と考えるのは文法上では不都合なのだろうか。しかし、不都合であったとしても、現に此処で他の接続助詞を伴わずに語用されているし、「堰き止む」の「止む」を意思ではなく能力と見れば、此処の言い方はそのまま＜止められず＞で現代語になる。但し、此処の「止む」の語用は意思(広義の意思で判断や知覚認識を含む)と私は読むので、言い換えには＜止められずに＞と接続助詞「に」を補う。と、既に結論を言ってしまったが、更に文法の話に戻れば、終止形の「ず」とされる文末の語法も終助詞で良さそうだ。また、未然形ないし命令形とされる「な」は、「ず」の活用というよりは、いかにも「ぬ」の活用に見える。「ぬ」という＜対象概念を他の事物と特に切り離して意識する語＞は、反作動を示す語用と作動完了を示す語用とがあり、反動認識は主動詞の未然形に、完了認識は連用形に付けて使われる、と説明されるが、未然形と連用形が同じ活用の動詞は一段と二段活用の全てなので甚だ紛らわしい。こういうものは語用や言い回しの類型を覚えるしかなさそうだが、私は其処まで古文に馴染みが無い。だから、こうした各語の成立や文法の辻褄は専門家の仕分けに委ねたいが、私としては「ず」は未活用の助詞と見做したい。が、そのへんはともかくとしても、一般に事象認識は否定状態を想定したままでも、思考としては更にその概念を動かして考えてみる事は出来るからか、「ず」に「あり」を付けた「ざり(～ではない状態でいる)」という語が用いられるようになった、との説明も古語辞典にある。例えばこの文を「ざり」を使って言い換えれば＜涙をえせきとめざるに＞みたいになるのかも知れない。ただ、いずれにせよ現代語では、「ず」には容易に接続助詞「に」が付く。

「さらば(それでは)、ひが心にて(父入道は偏狭な考えで)、わが身を*さしもあるまじきさまにあくがらしたまふと(私をあのように殿に置き去りにされた姿で思い焦がれさせなさなさると)、中ごろ思ひただよはれしことは(私が一時は思い彷徨ったことは)、かくはかなき夢に頼み

をかけて(こうした僅かな夢に望みをかけて)、心高くものしたまふなりけり(父入道が高い理想を持っていらっしゃったからのことだったのだ)」　*「さしもあるまじきさま」は注に＜『完訳』は「明石の君が源氏と別れて明石にいた時、また大堰で過した時」と注す。＞とある。が、大堰での子別れは、明石姫を源氏家の正統な娘として育てて入内準備をするという源氏殿の意向を、明石御方も尼君も承知して、またそれを自分たちの誉れでもあると自覚して、王家との繋がりを得るためという意味を理解していたし、そういう意味に於いて御方は自分と源氏殿の深い縁を知っていただろうから、「あくがる(地に足が着かずに彷徨う)」状態ではなかった、と私は思う。ので、この「あるまじきさま」は光君が一人で帰京して身重の御方が一人明石に残された時の不安であり、そういう事も有り得る事を承知の上で相当強引に自分を光君に引き合わせた、またその為に子供の時から分不相応なほどの上流教育を自分に施した父入道への懐疑心、を一時は御方が抱いた、ということを指しているのだろう。何しろ、光君が帰京した時点では、いくら朱雀帝に呼び戻されたとは言っても、光君の内大臣就任やまして太政大臣就任などの目覚しい栄達は少しも保障されておらず、せいぜい僅かな可能性に過ぎなかったのだから。しかし、父入道は、そして恐らく源氏殿は、それを知っていた、か、強く信じていた、という設定だったかと思う。

と、*かつがつ思ひ合はせたまふ(その父入道の願い通りのことの運びと成っている事を、やっと思い合わせて理解なさいます)。　*「かつがつ」は＜やっと、辛うじて＞で、今でもまれにギリギリ感を「カツカツ」と言う事がある。

[第六段　尼君と御方の感懐]

尼君、久しくためらひて(尼君は少し経って落ち着いてから)、

「*君の御徳には(姫君が若宮をお産み為さった御運勢には)、うれしくおもだたしきことをも(嬉しく名誉な事も)、身にあまりて並びなく思ひはべり(身に余るほどこの上ないものと存じますが)、あはれにいぶせき思ひもすぐれてこそはべりけれ(幼くしての別離に悲しく胸塞がる思いも凄いもので御座いました)。　*「君の御徳」が示す具体事項を作者と共有しないと、何を言っているのか分からないし、読んだ事にならない。私は是を＜姫君が若宮をお産み為さった御運勢＞と取るが、外れていたら残念だ。しかし、分かり難い文だ。ただ、明石御方は今のところ、公式には桐壺妃の母君ではなく別当乳母くらいの立場だ。拠って、若宮の実の祖母だが、公式には別当祖母というか、そういう公式な立場は無いから、祖母代わりの御部屋様でしかない。勿論、桐壺妃が立后し、更には若宮が即位する日を見れば、相当な厚遇は期待されるし、その事情を周囲の者も知っているから特別な存在には違いない。が、今は今上帝体制下での序列で組織運営されている。そういう人に母である尼君が、丁寧語を使ったり、それなりに敬意を表するのは良いとしても、直接「君」と呼んだり、「御徳」と持ち上げることには、私は違和感を覚える。

*数ならぬ方にても(片や取るに足らない身分の入道殿にしても)、ながらへし都を捨てて(住み慣れた都を捨てて)、かしこに沈みゐしをだに(明石に地方官として身を沈めていただけでも)、世人に違ひたる宿世にもあるかな(普通とは違う運勢であるものだ)、と思ひはべしかど(と思っておりましたが)、　*「数ならぬ方」は入道。また、「方にても」は＜もう一方に於いても＞という言い方。

生ける世にゆき離れ(入道殿が出家したので、生きながらに行き別れて)、隔たるべき仲の契りとは思ひかけず(別居となる定めの夫婦の仲とは思ってもいなくて)、*同じ蓮に住むべき後の世の頼みをさへかけて年月を過ぐし来て(それならせめて、極楽ででも一緒に暮らそうという死後

の望みさえ誓って私も出家し、長年同じ明石に暮らして来て)、にはかにかくおぼえぬ御こと出で来て(俄かにこうした思いも寄らない源氏殿の御栄達の時勢となり)、*背きにし世に立ち返りてはべる(捨てた都に立ち帰って来たのです)。　*「同じ蓮に住むべき後の世の頼みをさへかけて」は私には意外な入道夫妻の夫婦愛だった。 *「背きにし世に立ち返り」は＜還俗＞に聞こえるが、尼君は今でも尼君なので、是は＜捨てた都に還る＞ということを出家者っぽい言い回しで言った、ということらしい。

かひある御ことを見たてまつりよろこぶものから(桂の大堰では、姫君が源氏殿に引き取られなさる御栄誉を甲斐有る事と拝し申し上げて喜びながらも)、片つかたには(荘園経営の為に明石に残った、片方の入道殿については)、おぼつかなく悲しきことのうち添ひて絶えぬを(近況や安否さえ知らせて来ないで、おぼつかなく物悲しい気持が絶えなかったというのに)、つひにかくあひ見ず隔てながらこの世を別れぬるなむ(ついにこうして会わずに死に別れるというのは)、口惜しくおぼえはべる(心残りでなりません)。

*世に経し時だに(入道殿は宮仕えをしていた時でさえ)、人に似ぬ心ばへにより(他の人とは違う考え方によって)、世をもてひがむるやうなりしを(地方官を志願して、世情を引いて見ていたようだが)、若きどち*頼みならひて(私たちは若い者同士で早くに結婚していて)、おのおのはまたなく*契りおきてければ(それぞれ浮気もせずにいつも共寝していたので)、かたみにいと深くこそ頼みはべしか(互いにとても深く信頼しあっていたものです)。いかなれば(どうして)、かく耳に近きほどながら(こんな直ぐ頼りも届く距離なのに)、かくて別れぬらむ(入道殿はこうして会わずに別れて行ってしまったのだろう)」　*「世に経し時だに」は注に＜『集成』は「宮仕えをしていた時でも」。『完訳』は「まだ俗人でいらっしゃったころでさえ」と訳す。＞とある。「俗人でいらっしゃったころ」は「宮仕えをしていた時」と同じ時期の別側面だから、本文の言い回しがどちらを指し示しているかということだが、話の順として仏門入道の話題は既に済んで、此処では話題対象が変わっている筈なので、この「世」は出家に対する＜世俗＞ではなく＜公職＞なのだろう。　*「頼み馴らふ」は＜頼みとすることを習慣とする←結婚する＞で、「若きどち」で「慣らひ」にするということは＜早くから結婚している＞。　*「契り掟つ」は＜約束を取り決める＞ではなく＜情交を励行する＝いつも共寝する＞と読みたい。そうでないと、「頼み」「契り」そしてまた「頼み」と語られる各語の文意が通らない。ただ、そうすると、是を聞かされる御方には、自分の辛い人生と比して、両親の結婚が羨ましいほどの恋愛話に聞こえそうで、複雑な印象だ。が、そういう両親の実態を知る御方にしてみれば、恋愛の情熱もこの程度のものなのか、と醒めた見方をしていた可能性も有り得る。権威、権力、物欲、文化、作法、式典、などの知的財産と、愛欲、生理、情熱、信義、競争、などの行動感情とは、相互作用や補完や比較というそれぞれが絡み合った関係性に於いて実相するので、どれか一つを取り出して絶対価値を考えても、それはその時点での個人的な関心・趣味に過ぎない。

と言ひ続けて、いとあはれにうちひそみたまふ(とても辛そうに眉をひそめなさいます)。御方もいみじく泣きて(御方もとても悲しんで泣いて)、

「人にすぐれむ行く先のことも(私たちが人に勝る地位に就く将来の誉れも)、*おぼえずや(父入道は見ないのか)。*数ならぬ身には(取るに足らない田舎者には)、何ごとも(都でのどんな成果も)、けざやかにかひあるべきにもあらぬものから(はっきりと自分の働きが目に見えて現れるものでもないから)、あはれなるありさまに(自分は恩恵に与れないままに)、おぼつかなくてやみなむのみこそ口惜しけれ(目立たずに死んでゆくだけだという父入道の犠牲精神こそが心残り

でなりません)。　*「おぼえずや」の主語は入道。おぼえたまはずや、などの敬語が無いのは身内ならではの感嘆句だからだろう。歌に敬語が無いのと同じだ。　*「数ならぬ身」は入道。入道が手紙で自身を示した言葉だ。御方が卑下するにしても、それこそ若宮の祖母なのだから、若宮に対する礼としても、今や自身を「数ならぬ身」とは言えないだろう。

よろづのこと(すべては)、さるべき人の御ためとこそおぼえはべれ(そうした父君の御意志に沿うようにと私は思って来たのです)。さて絶え籠もりたまひなば(そのように絶縁して入山なさって)、世の中も定めなきに(まだ若宮の即位はおろか姫君の立后も見ない内に)、やがて消えたまひなば(このまま亡くなってしまっては)、かひなくなむ(張り合いがありません)」

とて、夜もすがら(夜を過ごしながら)、あはれなることどもを言ひつつ明かしたまふ(思い出話を続けて朝を迎えなさいます)。

[第七段　御方、部屋に戻る]

「昨日も大殿の君の(昨日も源氏殿が)、*あなたにありと見置きたまひてしを(私が春の町に居るのを見知り置きなさっているのに)、にはかにはひ隠れたらむも(急に姿を隠したのも)、軽々しきやうなるべし(軽率な振る舞いのように見えそうだ)。　*「あなたにあり」は注に＜主語は明石御方。＞とある。敬語が無いことに注意せよ、ということだろうが、確かに「大殿の君のあなたにあり」と読んでしまいそうな分かり難い語り口だ。

身ひとつは(私自身は)、何ばかりも思ひ憚りはべらず(如何思われても構いません)。かく*添ひたまふ*御ためなどの*いとほしきになむ(こうして側仕え申し上げる若宮の御威厳に障るかと)、心にまかせて身をももてなしにくかるべき(勝手が憚られるのです)」　*「添ひたまふ」の「たまふ」は会話に於ける話者の謙譲語ないし丁寧語で、主語は御方で、御方が若宮を＜御世話奉る＞という意味、と取る。*「御ため」の「御」は＜若宮の＞の意。「ため」は＜利益＞で、「など」と類例を示す副詞を伴うので、「ためなど」は具体事例ではなく＜有利になること＞という概念を言っているかと思われ、そういうものは＜体面、威厳＞などと言う。*「いとほし」は＜懸念されるさま＞。

とて(と御方は尼君に言割って)、暁に帰り渡りたまひぬ(まだ日の出前の暗い内に春の町に帰りなさいました。その際に、)。

「若宮はいかがおはします(若宮はどんな御様子でしょうか)。いかでか見たてまつるべき(どうすればお会い出来ましょう)」

とても泣きぬ(と言って、また尼君は泣きました)。

「今見たてまつりたまひてむ(直ぐに御会いなされましょう)。*女御の君も(妃も祖母君を)、いとあはれになむ思し出でつつ(とても身近に思い出しなさることが何度もおありで)、*聞こえさせたまふめる(側仕えの女房などに様子をお尋ねなさるようです)。　*「女御の君」と桐壺妃のことを御方は尼君に言い示す。また、源氏殿を「院」と言う。これらは比較的分かり易い語用だが、その下に「尼君」とあるのは、源氏殿の言葉を引用したもので、御方が尼君を直接「尼君」とは呼ばないだろう。今でも人の呼び方は難し

く、それは恐らく日本語の特性ではなく人間社会の複雑さに拠るものだろうが、この物語では、社会背景・時代背景も然り乍ら、登場人物の血縁関係も複雑で、単に誰をどう呼ぶか、だけではなく、誰に誰の事をどう指し示すのか、などは私には予見できない。　*「聞こえさせたまふ」は全体で＜お話しあそばす＞とのように訳文があり、そういう語用の尊敬語と古語辞典にも説明がある。が、「聞こえさす」の「さす」は＜仕向ける＞の語感で基本的には使役を意味し、謙遜語の「聞こゆ」に付けた場合は自己使役で一段の謙遜を意味する、ように思えてならない。その線で考えると、少なくもこの場合は「めり」を伝聞ないし同席他聞と取れば、「聞こえさす」を妃が側近に使役させた、つまり女房に＜話しをさせる←様子を聞く＞、と取る事も出来そうに見える。で、そう取る。

院も(源氏殿も)、ことのついでに(話しの序でに)、もし*世の中思ふやうならば(もし時勢が思い通りのようになるならば)、ゆゆしき*かね言なれど(不謹慎な物言いなれど)、尼君そのほどまでながらへたまはなむ(尼君はどうぞその時まで生き永らえなさるように)、と*のたまふめりき(と仰せになったようですが)、いかに思すことにかあらむ(何をお考えになってのことでしょうか)」　*「世の中思ふやう」は注に＜若宮の立坊をいう。＞とある。が、それは補語できない。そのことをワザと御方がぼかした言い方をしているからだ。この源氏殿の言葉を御方は「のたまふめりき」と尼君に伝えている。この不確かさを示す助動詞「めり」は、殿の発言を妃から伝え聞いたという意味ではなく、話の内容が分かり難いという意味だ。いや、御方自身はその意味を良く承知しているが、それを明示しないで暗号化することで、それを符牒として理解できる仲間意識を刺激した言い回しで、尼君をくすぐった、という場面だ。だから、此処は本文のままに言い換える。　*「かねごと」は「予言」で、「ゆゆしき」は＜不吉な＞だから、「ゆゆしきかね言」は＜不吉な予言＞。ただ、此処での「ゆゆしき」は＜生死に関わることを遠慮して言う＞という意味なので＜不謹慎な言い方だが＞くらいの言い方に思う。　*「のたまふめりき」の「めり」については既に見た。ここでは「き」を見る。「き」は難しい。というより、辞書を見ても「き」の文法解釈が整理されていない。辞書にはこの語を＜過去を示す助動詞＞と分類してあるが、その項目解説は用例・用法の羅列に終わっていて、体系分類上の説明が非常に煩雑で分かり難く、手応えが無い。私は、「き」は「来(く)」の連用形だと思う。ただし、この「来」は＜行く、来る＞を意味する動詞ではなく、事象の進行を示す助動詞だ。同様に、助動詞「き」の連体形と説明される「し」は、動作の進行を示す助動詞「す」の連用形と見れば、それぞれは別個の類似語として統一した説明方法での分類が出来るだろう。即ち、進行を示す助動詞の連用名詞であれば、「き」は何かが＜起きた事、起きている事、起きた状況、起きている状況＞を示し得るし、「し」は何かを＜した事、している事、した状況、している状況＞を示し得る。で、何かが起きることは誰かが何かをすることで、何かをすることは何処かで何かが起きることだから、両者は説明の仕方や物の見方の違いであって、何らかの事態があることに変わりは無く、違うといえば違うし同じといえば同じ、というワケだ。そして、此処の文のように連用中止であれば、接続語用となる。この説明方法が一般化できるのかどうかは分からないが、とりあえず此処では有効だ。

とのたまへば(と御方が仰ると)、またうち笑みて(尼君は笑顔に戻って)、

「いでや(いやだから)、*さればこそ(一方ではそれほどの栄誉が有り得るから)、さまざま例なき宿世にこそはべれ(若宮の王位と大祖父殿の謹慎とそれぞれが天地ほども違う運勢を持つというわが一族の他に例を見ない極端さなのです)」　*「さればこそ」は御方が尼君に、殿の言葉として「もし世の中思ふやうならば」と若宮の立坊が大いに期待できることを仄めかしたが、御方はその意を直ぐに汲んで＜それが期待できるから＞と応えた、ということだろう。

とて喜ぶ(と言って喜びます)。*この文箱は持たせて参う上りたまひぬ(入道が贈って来た手紙と願文の入った文箱は女房に持たせて御方は桐壺妃の部屋に参上なさいました)。　*「この文箱」は入道が手紙と共に「さて、かの社に立て集めたる願文どもを、大きなる沈の文箱に封じ籠めてたてまつりたまへり」(本章三段)と贈って来たものだ。